

第2章 障害児保育・特別支援教育の基本

▶ Episode 2 ◀ 部分実習での反省

Fさんの保育実習も2週目に入り、今日は3歳児クラスで部分実習を任されています。Fさんは、6月という季節に合わせて、細かく切った折り紙を紙皿に貼ってアジサイを作るという指導案を立てました。

子どもたちは4人ずつグループになって着席しています。Fさんは、まず一人ひとりに紙皿を配りました。次に、細かく切ったピンク色と紫色の折り紙を箱に入れたものと、チューブ糊を紙片の上に出したものを各テーブルにひとつずつ配りました。Fさんが説明を始めます。「先生がやるので見ててね。はじめにピンク色の折り紙を貼るよ。折り紙のうしろに糊をつけて、お皿の上にペタン!」。Fさんの話が終わるのを待たず、子どもたちは折り紙に手を伸ばします。ダイチくんは真っ先に折り紙を取ろうと、折り紙の箱を手元に引き寄せました。同じテーブルのシンタロウくんとユウカちゃんは「取れないよお」と箱を戻そうとしています。Fさんはその場へ行き、「みんなで使おうね」と3人に話をして、数枚ずつ折り紙を渡しました。隣のテーブルでは、アキトくんが紫色の折り紙ばかり取って、糊をたっぷりつけて紙皿に貼っています。手も紙皿も糊でベタベタです。Fさんがアキトくんの手を拭いていると、後ろのテーブルでは箱が落ちて、折り紙が床に散らばっています。

1. 発達の見方と気になる発達の評価

【1】 発達評価の視点と三領域

保育者として子どもにかかわる上で、「発達に合わせた保育」は必ず覚えておきたい視点です。発達に合わせるとは、別の言い方をすれば、子どものできるレベルあるいはできそうなレベルに合わせるということです。エピソード2でFさんが考えた活動内容は、子どもたちにとって難しかったようですが、どこが難しかったのでしょうか。

たとえばダイチくんがいたテーブルでは、折り紙の箱の取り合いが起きました。3歳のこの時期では、ひとつのものを順番に使うのが難しい子どももいます。Fさんは活動中に対応しましたが、初めから一人ひとりに折り紙を配ってもよかったです。また、アキトくんは糊をたくさんつけていましたが、3歳のこの時期には、指先の器用さが十分に育っていない子どももいます。その点では、Fさんが前もって細かく切った折り紙を用意したのは適切だったといえます。

では、もしこのクラス子どもたちが、「紙を切って貼る」という制作をするとしたら、発達に合わせてどのような配慮ができるでしょうか。この場合、たとえば両手で紙をちぎるということや、前もって保育者が切り取りやすくした紙を切り離すことなどができるでしょう。糊をつけることが難しければ、シールを貼るということもできます。このように、子どもたちはその発達に合った活動を重ねることさまざまな経験をし、興味や関心の幅を広げていきます。



子どもたちの発達に合わせた保育をおこなうために、保育者は子どもがどこまでできるのか、すなわちどう発達しているのかを、子どもの行動から把握することが大切です。これを、**発達評価**といいます。

❖ 発達評価の視点

一般的に、発達は大きく分けて**知的発達**、**運動発達**、**社会性の発達**の3つの領域から評価をすることができます。

知的発達

知的発達とは、知能すなわち考える力の発達のことです。エピソード2で、アキトくんは、Fさんが「はじめにピンク色の折り紙を貼るよ」と言ったにもかかわらず紫色の折り紙を取っていました。一般的に、色の区別は3歳代前半にできるようになりますが、青・赤・黄・緑などの基本的な色以外は、理解がもう少し後の時期になることがあります。ということは、アキトくんの年齢を考えると、ピンクや紫はまだ区別できない可能性があります。つまり、Fさんの説明が難しすぎるのです。色の理解のほかに、知能には以下のようなものがあります。

言語機能：ことばを話す、聞く、書くなどして理解する力です。発達により語彙ごいの数が増え、長い文がつけられるようになります。また、他者とのことばのやりとりも上手になります。たとえば1歳6か月頃には「新聞を持ってきて」のような

表2-1 表出されることばの発達

生後	表出することばの様子
3か月頃	クーイング（のどの奥で出すクークーというような音）
6か月頃	喃語（バーバー、バーダーなど音の繰り返し）
1歳頃	初語・一語文（「マンマ」など一語で意思を伝えようとする）
1歳6か月頃	二語文（「ブーブ、ナイ」など、二語をつなげて意思を伝えようとする）
2歳頃	多語文（三語以上の語をつなげて意思を伝えようとする）
3～4歳頃	基本的な構文の獲得（「て・に・を・は」などを使って単語をつなげる）
5～6歳頃	文字の読み書きの開始

簡単な指示を理解して実行できるようになったり、3歳代の半ばには、嫌な気持ちのときに相手を叩いたりせず、ことばで主張できるようになります。ことばの大まかな発達を表2-1に示すとおりです。

位置関係（空間認知）：ものの位置がわかることです。目の前のものを取ったり、積み木を積んだり、文字を書いたりするとき（線を組み合わせて文字の形にする）には、目で見た位置に合わせて身体を動かす必要があります。このときの位置関係を把握するために知能が使われます。また、転がるボールや飛んでくるボールなど動くものを捕らえるときにも、位置関係を把握する力が使われます。

数の理解：ものを1対1で対応させる*、数をかぞえる（計数）、量の多少がわかることです。一般的には、3歳代半ば頃から10までの数が数えられるようになります。

概念化：生活のなかにある状態や状況を、「大きい・小さい」「高い・低い」などのことばで表すことです。たとえば、梅干を食べると口のなかに刺激を感じて唾液が出てくる状況は「すっぱい」ということばで概念化できます。大きさの概念（大きい・小さい）は2歳頃までに、高さ（高い・低い）や長さ（長い・短い）の概念はおおむね2歳代後半にわかるようになります。また、5歳頃になると方向（上下・前後）などに加えて「親切」などの概念もわかるようになります。

時間の概念：過去・現在・未来や時間がわかることです。たとえば、昨日・今日・明日のような時の流れの概念は、5歳頃までに理解されます。そのため、3歳になったばかりの子どもに「昨日は何をしてあそんだの?」と聞いても、昨日より前に起こったことや、今からすることを答えるかもしれません。また、5歳を過ぎた頃から時計が読めるようになる子どもが増えてきます。時計の読み方は小学校1年生の算数で学習する単元ですので、6歳から7歳頃になると、ほとんどの子どもが時計を読めるようになります。

*異なるグループの個体数を対応させて、数量の大小を確認すること。たとえば、皿とリンゴが複数あってどちらが多いか知りたければ、一枚の皿につき一個のリンゴをのせていき、余った方が多いとわかります。

その他：これらのほかにも、知能には経験したことを覚えておく「記憶」、これまでの経験をもとにこれから何が起こるかが予測できる「推測・推論」、経験を生かしてよりよい行動をとることができる「学習」などがあります。以上にあげたような知能のうち優れている部分を調べたり、全体的な発達のバランスを見る際には「知能検査」（→p.42）が使われます。代表的なものには、田中ビネー式知能検査やK-ABC心理・教育アセスメントバッテリーなどがあります。

運動発達

運動発達とは、自分の意思で身体を動かす力の発達のことです。エピソード2では、アキトくんが糊を取り過ぎて手や紙皿をベタベタにしまいました。これは、指先の細かな運動の発達が未熟なために、適量の糊を取ることが難しいということです。

一般的に運動発達は、**粗大運動**（移動運動）と**微細運動**（操作運動）に分けて評価をします。粗大運動とは、「歩く」「転がる」「跳ぶ」「ぶらさがる」といったような身体を大きく動かす運動のことを指します。また、微細運動とは、「つまむ」「まわす」「ひねる」といったような主に手先を細かく動かす運動を指します。

運動の発達には、図2-1に示すような一般的な傾向（法則性）があります。

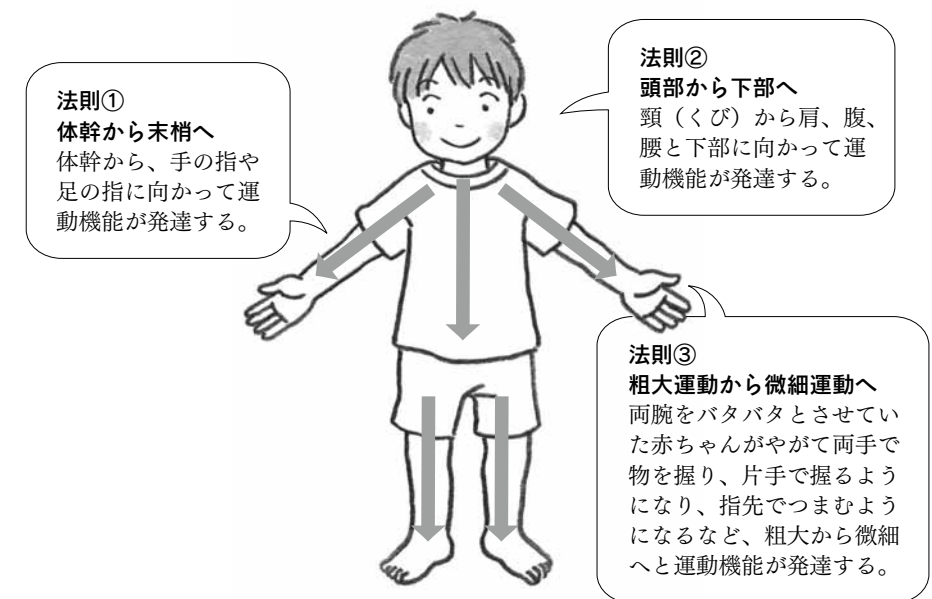


図2-1 運動発達の法則性

子どもが生まれてからひとりで歩けるようになるまでの時期は、とくに粗大運動が育つ時期です。図2-1に示した運動発達の一般的な傾向から考えると、生後初期の段階で育つ動きは、体幹上部の粗大な動きになります。これが「首がすわる(定額)」ということです。

首から肩までの動きが育つと、ねがえりができるようになります。また、腰まで育つとひとりすわり(座位)ができるようになります。さらに膝まで育つと、はいはいを経てつかまり立ちになり、片足でのバランスがとれるようになると、ひとりで歩くことができます。

このような運動の発達について、厚生労働省による「乳幼児の運動機能通過率」という調査結果があります(表2-2)。網掛けにした箇所は、その運動をおおむね90%の子ができるようになった時期です。生後4から5か月で90%以上の子どもの首がすわり、次いでねがえり、ひとりすわり、はいはいを経てつかまり立ちをし、1歳3から4か月になると90%以上の子どもがひとりで歩けるようになることがわかります。この表からも、運動発達が図2-1で示した法則にしたがって進むことがわかります。

表2-2 一般調査による乳幼児期の運動機能通過率

年月齢	首のすわり	ねがえり	ひとりすわり	はいはい	つかまり立ち	ひとり歩き
2~3か月未満	11.7	1.1				
3~4	63.0	14.4				
4~5	93.8	52.7	0.5	0.9		
5~6	98.7	86.6	7.7	5.5	0.5	
6~7	99.5	95.8	33.6	22.6	9.0	
7~8		99.2	68.1	51.1	33.6	
8~9		98.0	86.3	75.4	57.4	1.0
9~10			96.1	90.3	80.5	4.9
10~11			97.5	93.5	89.6	11.2
11~12			98.1	95.8	91.6	35.8
1年0~1か月未満			99.6	96.9	97.3	49.3
1~2				97.2	96.7	71.4
2~3				98.9	99.5	81.1
3~4				99.4		92.6
4~5				99.5		100.0

(厚生労働省「平成22年乳幼児身体発育調査報告書」より)

ひとり歩きができるようになると、移動の範囲が広がります。また、上肢、下肢を自分の思うように動かすことができるようになるので、さらに多くの動きを身につけていきます。たとえば、2歳過ぎには足を一歩ずつ出しながら階段を上がれるようになったり、両足をそろえてジャンプができるようになります。また、体幹と四肢をあわせて使うことで、走る、転がる、投げるなどの基本的な動きができるようになります。

このような基本的な動きはおおむね3歳には完成するとされています。動きは経験を重ねることによって身につくので、子どもは、運動発達に合わせた動きを生活場面やあそびのなかで経験することが望まれます。大きな動きの例としては以下のようなものがあります(表2-3)。

表2-3 大きな動きの例

体のバランスをとる動き
立つ・座る・寝ころぶ・起きる・回る・転がる・渡る・ぶら下がる
体を移動する動き
歩く・走る・はねる・跳ぶ・登る・下りる・這う・よける・すべる
用具などを操作する動き
持つ・運ぶ・投げる・捕る・転がす・蹴る・積む・こぐ・掘る・押す・引く

(文部科学省「幼児期運動指針ガイドブック」より)



第5章 発達が気になる 子どもの理解と保育

▶ Episode 5 ◀ 活発すぎるカズキくん

カズキくんは保育所に通う4歳10か月の男の子です。1歳で入園した当初から活発な姿が見られましたが、しばしばほかの子どもを叩いたり引っかいたりすることが多く、保育者は目が離せませんでした。

4歳児クラスになると、カズキくんの落ち着きのなさはさらに目立つようになりました。集まりのときも常に身体を動かしたり、大声を発したりしています。また、ロッカーの上から飛び降りることを好んで繰り返すようになり、一部の友だちも同調して一緒にあそびはじめました。保育者がカズキくんを落ち着かせようとすると、「だって、ぼく静かにできないんだもん」などと言って保育者に甘えたり、「どうせぼくなんかダメな子なんだ。いなくなっちゃえばいいんだ」などと自らを卑下することばや態度がたびたび見られます。

担任の保育者はカズキくんの様子が気になり、母親と面談の機会をつくって話をしました。しかし母親は、「カズキは、3歳の乳幼児健康診査（→p.185）でも何も指摘されていません。夫もこの子のお姉ちゃんも、小さい頃は落ち着きがなかったんですよ」と言い、カズキくんの様子を心配している様子は見られません。

1. 発達が気になる子どもとは

エピソード5に登場した保育者は、カズキくんの様子に気がなったため保護者との面談をおこないました。なぜ「気がなった」のか、エピソードの場面を想像しながら考えてみましょう。

カズキくんは、保育者と個別にやりとりができています。また、ロッカーの上から何度も飛び降りたり、友だちと一緒にあそんだりもしています。このような姿を、第2章で学んだ**発達評価**に照らし合わせてみてください(→p.25-)。カズキくんの場合、知的発達(ことばのやりとり)、運動発達、社会性の発達などに大きな遅れはないようです。その一方で、他児に手をあげてしまう、集まりで落ち着いていられないといった姿から、集団のなかで保育をする上で配慮が必要だと考えられます。

このように、会話や思考、身体活動や社会性の発達において目立った遅れは見られないものの、集団活動でほかの子どもに合わせるができない、周囲の様子を理解できない子どもがいます。保育のなかでは、以下に示すような姿が「気になる」様子としてとらえられることがあります。

- ・会話のなかで質問と答えがかみ合わないことがある。
- ・体当たりをしたり、高いところから飛び降りることを好む。
- ・嫌なことがあると奇声を発し続けたり、大騒ぎをする。
- ・活動がなかなか切り替えられない。



発達が気になる子どもに共通する特徴に、「不器用さ」があります。この「不器用」には、身体だけでなく、自分の気持ちをコントロールすることも難しいという意味も含まれます。また、自分のおかれている立場や他者の気持ちなどを理解することが難しい場合もあります。これは対人関係の不器用さといえます。

このような不器用さの背景には、**身体感覚**の歪みや偏りがあるということが近年の研究でわかってきました。そこで、続いてはこの身体感覚の歪みや偏りと、それを改善する保育の方法について説明をします。

2. 身体感覚の偏りと不器用さ

【1】情報入力としての五感

私たちは生活のなかで、常に何かを見たり聞いたりしています。この**視覚**や**聴覚**と、**味覚**(味わう)、**触覚**(触れる)、**嗅覚**(におう)という外界を感じるはたらきをあわせて**五感**と呼びます。私たちは五感を通じて外界の情報をとらえ、理解しながら生きています。しかし、発達が気になる子どもの多くは、五感に歪みや偏りがあるために外界とうまくかかわれないことがわかってきました。

五感の歪みや偏りとは、情報が多く入りすぎたり、十分に入ってこないことがあるという状態を指します。前者は敏感、後者は鈍感ということです。誰にでも多少の感覚の敏感さ、鈍感さはあるのですが、この程度が大きくなり、生活に影響を与える場合には「**過敏**」や「**鈍麻**」と呼ばれる状態になります。五感が過敏あるいは鈍麻な幼児は、保育のなかでどのような姿を見せるのでしょうか。表5-1で、具体例を見てみましょう。



表5-1 五感の過敏・鈍麻と子どもの姿

五感	感覚が過敏な場合	感覚が鈍麻な場合
視覚	<p>集中できない／気が散りやすい</p> <ul style="list-style-type: none"> →・じっとしてられない、落ち着かない ・あそびが次々に移り変わる 	<p>広い視野で周囲を見渡せない</p> <ul style="list-style-type: none"> →・持ち物を揃えることが苦手（忘れ物が多い） ・物を落としても気がつかない ・周囲の動きに気がつかず、活動から取り残されてしまう
聴覚	<p>周囲の人にとっては普通の大きさに聞こえる音でも、非常に大きく感じられる</p> <ul style="list-style-type: none"> →・歌やリズムあそびのときに耳をふさぐ ・友だちが多く集まっている場所を避ける 	<p>自分に向けられた話に気がつかない</p> <ul style="list-style-type: none"> →・クラス全員で保育者の話を聞いている最中に他児に話しかけたり、自分がしたい話をする ・指示が長くなると後半が理解できない（「手を洗って靴を持って来てね」という教示をすると、手を洗うだけで待っているなど）
触覚	<p>周囲との接触を避けようとする／偏食が激しい</p> <ul style="list-style-type: none"> →・友だちが近づいてくると嫌がって逃げたり、接触を避けるために手を出したりする ・集まって座るときに肌が触れるのを嫌がり、立ち上がったたり立ち歩いたりする ・ネバネバ、ベタベタした食感の食べ物を避ける 	<p>強い力でさわったり、何度もさわったりする</p> <ul style="list-style-type: none"> →・相手が嫌がっていても頭や顔をべたべたとさわったり、友だちや保育者にすぐに抱きつく ・強い刺激を得るために友だちにぶつかったり、ロッカーなどの上から飛び降りたりする
嗅覚	<p>特定のおいを嫌がる</p> <ul style="list-style-type: none"> →・食事のとき、苦手なおいのするものを顔に近づけただけでも吐き気を催す 	<p>特定のおいの刺激を求める</p> <ul style="list-style-type: none"> →・スーパーマーケットなどで売り物のおいを逐一かいで回ったりする ※園では気になる様子が現れることが少ない
味覚	<p>特定の味を嫌がる</p> <ul style="list-style-type: none"> →・食事のとき、味が混ざることが嫌がる ・白米だけを食べるなどといった偏食が見られる 	<p>強い味覚刺激のものを好んで食べようとする</p> <ul style="list-style-type: none"> →・からいものなどを好む ※園では気になる様子が現れることが少ない

【2】五感の偏りへの対応と援助

❖ 落ち着いて過ごせる環境を設定する

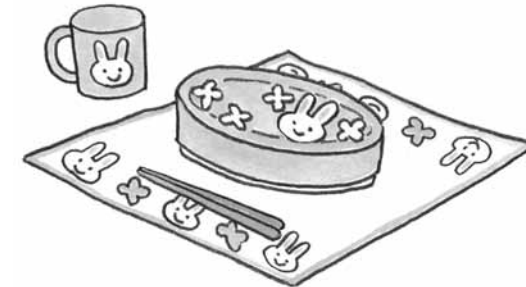
表5-1に示したように、五感が過敏な子どもの場合、その感覚刺激に注意が誘引されたり、避けようとしたりする姿が見られます。このような場合、保育者は感覚刺激が過度に入らないように環境を調整する必要があります。たとえば聴覚が過敏な子どもに対しては、クラスでの活動時に少し間隔を空けて席を作る、個別に静かな環境を用意するといった工夫ができるでしょう。

このような環境設定をする際に、「苦手な感覚刺激に慣れさせよう（克服させよう）」などと考えるはいけません。これは子どもにとっては苦痛でしかなく、繰り返し刺激を与えられると、登園自体を嫌がることにもつながります。

❖ バランスがとれている感覚を生かす

保育の環境設定をおこなうとき、基本的には活動に集中できる環境をつくりまします。たとえば保育者が素話をするときは、子どもが集中して聞けるような環境を整えます。短い歌や手あそびを取り入れて「お話が始まる」という導入をしたり、カーテンを引いて静かな空間にするなどの配慮をします。

一方で、感覚が過敏な子どもに対しては、この考えを逆転させた配慮が望まれます。たとえば偏食が激しい子どもは、嗅覚や触覚、味覚の過敏さが考えられます。そこで、過敏になっている感覚だけに集中しないように、ほかの感覚を刺激するのです。具体的には、その子が大好きな絵柄や色の弁当箱を使って、視覚（過敏な感覚以外の五感）を刺激することなどが考えられます。このような配慮によって、過敏な感覚への注意が弱くなる可能性があります。



一方、鈍麻な感覚がある子どもの場合は、刺激に気がつかなかったり、強い刺激で補おうとする姿が見られます。たとえば触覚が鈍麻な子どもであれば、友だちをベタベタとさわる、ロッカーの上など高いところから飛び降りるといった行動を好むことがあります。このような行動に対して、周りの子どもが嫌がったり、保育者が気になる行動ととらえる場合があります。このような場合には、友だちに影響を与えないようなかたちで感覚刺激を満たすと、行動が落ち着いてくることがあります。以下に、対応と援助の具体例を示します（表5-2）。

表5-2 五感の偏りへの対応と援助の例

五感	偏り	保育中に見られる姿	対応の例
視覚	過敏	集中できない 気が散りやすい	集まりのときには、最前列の保育者の目前に誘導する。他児が見えにくくなるため、目に入る視覚刺激が減じられる。
	鈍麻	周りに気がつかない	集まりのときには、最前列の保育者の目前に誘導する。保育者のはたらきかけがより明確にわかるようにする。
聴覚	過敏	大きな音を嫌がる 騒がしいと落ち着かない	集まりのときには、参加できる範囲で少し離れた場所に誘導する。また、制作など個別の活動は、他児が少なくなった状況で取り組めるようにする。
	鈍麻	声かけに気づかない 保育者からの質問と子どもの答えがかみ合わない	集まりのときには、保育者の目前などに誘導し、声かけに気づきやすくする。また、一対一で話しかける。教示や質問を短くして話しかける。
触覚	過敏	友だちと接近することを嫌がる	集まりのときには、友だちと距離を置いて座らせたり、列の端などに席を設定する。
	鈍麻	友だちにベタベタとさわる 何でも口に入れてあそぶ	事前に触覚刺激を与えることで、触覚刺激への欲求を満たすはたらきかけをする。
嗅覚・味覚	過敏	特定のにおいや味を嫌がる 偏食が激しい	ほかの感覚刺激を利用することで、嗅覚や味覚に対する注意をそらすようにする。ほかの食べ物に混ぜるなどして、特定のにおいや味に気づきにくくする。
	鈍麻	特定のにおいをかいで回る	事前に嗅覚刺激を与えることで、嗅覚刺激への欲求を満たすはたらきかけをする。

保育実習や教育実習で五感に偏りのある子どもに出会った場合、あなたならどのような配慮ができるでしょうか。子どもたちがより安心して園生活を送ることができるように、実践的に考える習慣をつけていきましょう。

【3】姿勢や動きをつくる体性感覚

身体感覚には、情報を感じる五感のほかに、姿勢や動きをつくる**体性感覚**があります。読者の皆さんは、今、椅子に座っていますか。よい姿勢を意識してみてください。姿勢を意識すると、背筋をまっすぐに伸ばしていることに気づくでしょう。このように、よい姿勢で座る際にはバランスに関する感覚がはたらいています。これは**前庭感覚**と呼ばれます。

また、姿勢を意識したとき、身体の中のどの部分に力が入りましたか。身体をどのような形にしてどの部分に力を入れると安定するかという、力のコントロールに関する感覚もはたらいています。これは**固有受容覚**と呼ばれます。私たちはこのような体性感覚を利用することで、姿勢や動きをつくることができます。

姿勢や動きをうまく保てず、身体活動が不器用な子どもは、このような体性感覚に偏りがあると考えられます。

では、体性感覚に偏りがあると考えられる子どもの具体的な姿について見てみましょう（表5-3）。

表5-3 体性感覚の偏りと子どもの姿

前庭感覚に偏りがある場合	<p>バランス感覚はよいが、少しスピードが出ても怖がる（過敏） →・ブランコを大きく揺らすと怖がる</p> <p>姿勢を保つことや、スムーズな移動が難しい（鈍麻） →・移動中によく転んだり、友だちにおつかったりする ・いつのまにか寝転んでいたりする</p>
固有受容覚に偏りがある場合	<p>自分の身体の位置（ボディイメージ）をとらえにくい →・人や物におつかる ・布団カバーに入り込み、外から強い圧力を受けることで安心する</p> <p>声の大きさや力のコントロールが難しい →・物をそっと握ることができず、おもちゃなどを壊してしまう ・場面を問わず大声で話す</p>